





































セクター分析（産業別利益動向）

	前回	今回	コメント
鉄鋼	 -----	 -----	原材料価格が下落基調にあり、鋼材価格についても、国内大口取引先向けに一定程度の値下げが行われている。また、輸出向けについても、中国鋼材市況が軟調に推移していることから、収益の改善は難しいものと予想される。
非鉄・電線	 -----	 -----	電線業界は北米・新興国向けの光ファイバー需要が持続するが、競争環境は厳しい。電子材料等の需要に減速感はあるが、自動車向けは回復が見込まれる。非鉄業界は金属市況の影響を大きく受けるが、総じて今後1年程度は横ばいとなる見通し。
化学	 -----	 -----	石油化学は、エチレン系製品を中心にアジアの需要低迷からマージンが低迷しており、今後も力強い回復は期待しづらい。また電子材料は、PC関連が不振であり半導体、液晶とも、一部を除き数量増を見込みにくい。総じてみれば利益は横ばい圏に留まる見込み。
紙・パルプ	 -----	 -----	段ボール市況は底堅いものの、印刷用紙は輸入紙流入等の影響により市況軟化が続く見通しである。国内需要の低迷により数量面の拡大も期待できないため、総じて今後1年間の利益は横ばい圏に留まる見込み。
建設・住宅	 -----	 -----	大手ゼネコンは、顕在化しつつある除染作業などの復興需要や不動産事業の収益性改善が利益にプラスに働く一方で、受注競争激化に伴い民間建築工事分野の収益性悪化が見込まれる。総じて今後1年間の利益は微増となる見通し。
不動産	 -----	 -----	物件供給増加に伴うマンション事業の収益改善が期待できる。一方、大手不動産会社の利益の大半を占めるオフィスビル賃貸事業は新規ビルが利益貢献するも既存ビルの減収により、横ばい程度に留まると考えられ、総じて今後1年間の利益は微増となる見通し。
自動車	 -----	 -----	欧州や中国における販売減少の影響はあるものの、米国およびASEANなどでの販売増加により、グローバル全体での生産台数増加を見込む。円高等による採算悪化はあるが継続的なコスト削減も寄与することから、今後1年間では増益となる見通し。
半導体・電子部品	 -----	 -----	スマートフォン市場での新製品向け部品の堅調な推移やタブレット端末の普及、タイでの洪水による悪影響の反動により、今後半導体・電子部品の出荷数量は増加する見込み。欧州での需要低迷などの懸念材料はあるものの、総じて今後1年間は増益となる見通し。
家電・AV	 -----	 -----	液晶テレビ、PC等主要製品の出荷台数は横ばいから微増を見込むが、価格低下の継続や円高の影響により、収益性回復のペースは遅い。ただし、構造改革の進展などによりコスト削減が見込まれ、利益は全体として横ばい圏の推移を見込む。

	前回	今回	コメント
機械			中国および欧州において設備投資の減速懸念があるものの、新興国インフラ整備・プラント関連等、中期的な成長局面に入っている分野もあり、全体として増益基調が続くと見込む。
運輸			鉄道大手は、運輸収入が堅調に推移し、利益の微増を見込む。海運大手はバラ積み船運賃の低迷はあるが、コンテナ運賃の底打ちおよび船体整理等の合理化により黒字転換を見込む。トラック大手は、荷動きが堅調に推移しており、利益の微増を見込む。
通信			移動通信は、スマートフォンへの転換が進む中、データ通信収入が増加する一方で販促費も増加する見込み。固定通信は、ネットワーク運用の合理化等によるコスト削減が見込まれる。総じて今後1年間の利益は微増となる見通し。
情報ソフト			システム投資は保守・運用分野の下支えに加え、開発案件の回復により上向き傾向が続く。堅調な受注環境から低収益案件の発生が抑制され利益率は維持される見込み。ただし、開発案件の受注回復ペースは緩やかで、総じて今後1年間の増益幅は小幅となる見通し。
小売			エコポイント効果の剥落した家電量販店など一部の業種においては、減益となっているが、食品スーパー・衣料品専門店などについては増益基調にあり、セクター全体としては小幅増益となる見込み。
食品			大豆・トウモロコシなどの価格上昇の影響により、原材料価格の上昇が見込まれる。油脂メーカー・即席麺メーカーなどは、ネガティブな影響を受けるものの、業界全体としては、値上げや販促費の削減などにより、利益は横ばい程度となる見込み。
医薬品			特許切れ及び薬価改定による利益への悪影響が顕在化すると見込まれる。一方、国内を中心とした新薬投入が利益成長に寄与することに加え、海外子会社関連の一時費用が減少し、全体としては微増益となることが見込まれる。
電力・ガス			各電力で従来水準での原発の稼働は難しい中、代替の電力供給も十分な見通しは無く、供給制約などにより販売電力量の増加は見込み難い。また、現状、電気料金値上げだけでは、販売マージンの改善も限定的で、総じて今後1年間は厳しい収益環境が継続すると見込む。ただし、原発再稼働状況に応じて収益が改善される可能性はある。
銀行			海外向け貸出は増加傾向にあるが、国内企業の資金需要の回復・リザヤ拡大は見込み難く、売上高にあたる業務粗利益の増加は見込めない。低金利環境下で債券売却益は好調だが、株式減損の拡大が見込まれる。総じて、横ばい程度の利益推移を見込む。

(注) 業種の代表企業群について、水平線は経常損益ゼロ水準、矢印は今後1年間の方向感を示す。増減益は経常利益が10%以上変化することを示す。